

詩時評

第37回

「一対一」で向き合う

松本衆司

世の中のほとんどすべてが「高速道路化」している現代社会の中で、高橋源一郎は言う。「——高速道路から降りましょうって、ぼくたちはずっと言ってるわけだから。という文脈で言うと、文学がなぜ必要かっていうとプレーキだからなんですよ。社会の流れに對する。文学は結局、いつも個人の側につく。文学は一人で、一対一でやるものなのでね（インタビュー）「最後に、あなたに会いたく」SAISON express 7・8月合併終刊号）言うまでもなく、書き手と読み手の関係は「一対一」なのだ。そして、詩や文学に限らず何事も歩く歩幅で確かめながら「一対一」で向き合うことが大切なのだ。そこに疎かにできない出会いがある。その出会いを通して、人は新たな自分を見出していく。

江口節詩集『扉が開くと』（編集工房ノア）を読む。「かぞく」を引く。

その時刻／冬の空に惑星が並ぶ／西に高く木星は長男の風格／真南に 赤い火星／寄り添う土星は白く／東南 山の端が明るんだ辺り／ひときはしゃいで輝く金星が／少しずつ昇りながら引つ張るように／東に ようやく水星が見えてくる頃／空は次第に明るみを増していく／遊ぶのはおしまい／おやすみ こどもたち／おかあさんが／光の布団を掛けていく

*二〇一六年二月十一日、明け方に惑星が五つ揃って見られた。木星、火星、土星、金星、水星。五つ全部を確かめたとき、南へ向かう始発電車の音が響いた。五時五十七分。

詩集の「あとがき」に「私は、島田陽子さんと一九八二年からその死の二〇一一年まで、共に『叢生』で書いてきた」とある。長年、島田さんの自由な詩作に触れて来られたのだから。なるほど、この詩集は豊かな風景に満ちている。詩人江口節の愛と慈しみに満ちた詩にしばし安らぎたい。そして、私の脳裏には若き日に幾度となく詩の会で出会った島田さんの穏やかな顔が浮かんでいる。

なかもりあつこ詩集『星を結んで』（私家版）を読む。「信じたい」を引く。

私の言葉を信じないで／いい人に見られたい／ため／ころにもない言葉を／真顔で言うかも／しれません／本当に思っている事は／誰かが言っていたと／素知らぬ顔で言うかも／しれません／あなたの言葉を信じません／ささやく愛の言葉も／時おり現れる諍いの言葉の数々も／一時の気の迷いとして相手にせず／ただ、これまで過／してきた日々と／きょう一日を自分の心の中に入れて／それでも何かとつながりたくて／言葉をさがし／言葉にたどり着けず迷っている／過ぎていく時間に／新しい今日が書き換えられていく／どこかにふりつむ思い出の／重なる場所があるのでしようか／／たとえば毎日洗われるタオル／新品に戻ることはかなわずとも／丁寧なたたまれていくつも場所にて／そのくりかえしの中に／いつまでも信じていたいなにかが／あるような気がして

人みな、背負うべき家族の歴史があり、その営みの中に人生の喜怒哀楽がある。そのよ／うな日々の感情の世界に生きる生活者としての思いに、丁寧に向き合い、逃げず逸らさず

受け止めて、家人の心と自らの心を見つめる。詩集『星を結んで』は詩人なかもりあつこの、そして家族の尊い心の束ねである。

橋爪さち子詩集『晴れ舞台』（土曜美術社出版販売）を読む。題詩「晴れ舞台」を引く。

炉から母のお骨が運び出されてきた／まだ熱いはずなのに／涼やかに咲く水辺の花のようで／もはや幼い日から限らない懐かしみと／甘やかな罪意識を／抱かせつづけた母ではなく 何かこう／／ひっそりと聖なる香りの／ここではない何処か／違う次元の存在に転じたように／／むしろ それは／至福にちかいかたちをしていた／／かも知れなかった／／かあさんの晴れ舞台です／ね／ふいに思いもかけぬことが／私の胸にひろがる／／係の人が／長い竹の箸で膝 大腿部と足許から／母の部分をひろいあげては壺に入れ／／私たち親族も促されるままに／頬や頭部のかげらを繰りかえし／壺にひろい納め 最期に／／座仏のかたちをした喉の部分が／壺の上部に納められて一度きりの母の／身を呈した渾身の舞台は蓋を閉じた／／この炉の先の森のはずれでは今／一匹のさなぎの背が静かに割れ／ま白な蝶が生まれようとすのだらう

詩集のいずれの詩篇もその描かれた世界に読者を引き込む。とりわけ「友 二」「殺意」とこの「晴れ舞台」は印象深い。百年の人生を閉じた「母」の骨を拾う静謐な「最期」をひとときの舞台とし、「森」に帰された魂魄が新たな命につながるという。「聖なる」とはこのようなものと思いたい。

網谷厚子『ひめ日和』（思潮社）を読む。「行き行きて」を引く。

お天道様に したたか打たれ 西 東 行き行きて 三界 目の覚めるような真つ赤な季の実が たわわに実る家に出会った いつの間に通り過ぎて行った 季節 冷たい風が 容赦なく一重の僧衣に打ちつけ 身体の芯から凍えていた 頭陀袋が骨と皮だけの肩に食い込み 托鉢をする指がかじかんだ 現在は 思うより早く変転し続けている 見渡せば 扉を巡らせた屋敷で 甘いお菓子を食べ 茶をたてる人がいる 生業に精を出し 溢れる銭を勘定している人がいる たくさんの子ども 孫 ひ孫に 囲まれて 笑っている人がいる 浮き沈みは世の常として どこかで はぐれた人生は 繕うことも難しく 帰るべき草庵ひとつ あればよし それもいつまでそこにあるだらう 竹林が風に揺れ さわさわと葉

が散る音を聞く 夜通し降る雨音 細い手足を存分に伸ばして寝る 友も皆 草深い山の苔の下で眠る どこまでも心まかせに雲のように漂い あるときは子どもたちと遊ぶ 王侯の位も神仙も 少しも羨ましいとは思わない 財宝も位も係累も墓には持つていけない 山林に薪を拾いに行き 街中で托鉢をする 西へ 東へ休みなく 靄 靄 風 雨の中を彷徨う 一つの黒い影となって 蒼天を巡る 白い雲となって 行き行きて 行き行きて 三界

衆生が住む世界は……と仏法は語りですが、一人一人は自らの生きざまを曝け出しながらの道行きである。「行き行きて」、そして人はどこに辿り着くのだらう。たとえ大河の一滴としての小我であろうとも、そこに現実の生がある。詩人網谷厚子は幻想を得て、その虚実の皮膜の世界を描く。

こたきこなみ詩集『ひとがた彷徨』（思潮社）を読む。「秋の声 黒陶の周辺」を引く。

古物市の片隅の 闇溜りだった／土の眠りをひそめて花瓶は秋の女であった／無造作に紙袋に包まれて私の窓辺に運ばれた／庭の草むらから野の花を一掴み引きぬいて 活けた／赤マンマ エノコロ草などの穂が

たわんだ／／夜半 しじまをくぐり 素枯
れた虫の声／野草に小さな虫がとまつて
いたのだ／季節を鳴きつくし行きも消え消え
にすり減らし／／黒陶は土のつぶやきを
ほどく／木枯らしが吹く前にもういちど逢
いたい／冬が過ぎたらもういちど生きたい

古物の黒い花瓶を買って来て、庭の野草を
無造作に花瓶に生ける、その小さな日常が斯
くも鮮やかに興行きのある詩に変身するもの
か。こたきこなみは「身柄を神になど返すも
のか」(胎冥／未生)と言う。戦時を知る世
代の、生への洞察と生きる眼差しに叩頭する。

中塚鞠子詩集『水族館はこわいところ』
(思潮社)を読む。「ふるさと」を引く。

いま／わたしの中から／出て行ったものは
なんだろう／ときどき／そんなことがある
／出て行くものばかりで／だんだん わた
しは軽くなっていく／あの時は、そうだ
／眼に見えないものばかりを求めて／出て
行ったのは わたしだ／だからいま うち
ひしがれて／乾いたビル風に吹かれて独り
歩いている／いつも どこかで呼びかけて
くる／残されたわたしの双子の妹よ／誰
も棲まなくなった廃屋の／朽ちて倒れかけ
た土塀の脇には／満開の紅梅／うす紅色の

山茶花がこぼれている／閉じられた雨戸か
ら差し込む光の中／ひっそりと納戸の隅に
うずくまっている／ああ わたしの妹／
私が見たのは、だれ／どんなに探しても
誰に聞いても／妹などいはいないのだった
／あれは／生まれることなく死んだわたし
の娘？／いやあれは わたし／こんなとこ
ろに

現実を生きたことと実存の意味を問い続け
ることは、時に二律背反的に追い詰められて、
精神の窒息を招く。中塚鞠子はこの立ち位置
でひたすらに生の方途を求め、いのちの郷愁
の場所を確かめようとしてきた。彼女は多年
にわたり大阪文学学校の講師として多くの文
校生を導いて来たが、この痛みを知る思想の
立ち位置から柔軟に語る柔和な大阪弁は、さ
ぞ多くの修了生に慕われたことであろう。

方良里(PAN YANRI)詩集『レモングラ
ス』(コールサック社)を読む。「ある街角で」
を引く。

ある街角で あの人は待っていた／ 来
るはずのない あなたを／焼けつく太陽
のもと／ 通りすぎる人々を 呆然と眺
めながら／／あの人は 待っていた／
来るはずのない あなたを／犬を連れてた

一人の女性が 通り過ぎる／ あの人
は犬に微笑みかけ／ それから 飼
い主の女性にも微笑みかけ／／人々は
足早に通り返る／ 街路樹のあいだを
少しうつむきながら／／あの方は 待って
いた／ 来るはずのない あなたを――

人の一生は喪失の歴史である。人は出会い
と別れを繰り返し、折々の悲喜交々の心を積
み重ね、人生を生きたる――とは、誰もが述懐
する言葉だが、詩人方良里はその喪失感を、
誰もが痛感するせつなさを、たださり気なく
詩にする。これも詩の粹な居場所である。

瀬野とし詩集『まわれ まわれ』(編集工
房ノア)を読む。「灰」を引く。

学校から帰ると／部屋がほわつとあたたか
い／火鉢からヤカンをおろす／こんもりと
かぶさった灰を／火箸で掻くと／赤い炭火
が顔を出し／わたしは思わず手をかざす／
火はわたしを待っていてくれた／働きに出
た 母の代わりに／灰をもつと掻くと／大
きな焔が現れる／焔を囲んでいた灰までも
／あかあかと燃えているのだ／／わたしは
いつも不思議に思うのだった／灰は燃えて
しまった炭だから／死んでいるはずなのに
／火を包んで どうしてこんなに／火を守

り 生かすことができるのか／そして 死んだ灰自身があかあか燃えるのか／土で包んだら 火は消えてしまうのに……／燠が小さくなっているときには／わたしはあわてて炭を継ぎ／ふーっ ふーっ と息を吹きかけ／火を大きくするのだった／長い年月がたって／いま わたしは知っている／死者が 生きているわたしを包んで／わたしを守り 生かしてくれたことがあったと／死者が 燃えているわたしといっしょに／あかあか燃えてくれたことがあった、と／わたしが消えそうになったとき／ふーっ ふーっ と息を吹きかけ／わたしを勇気づけてくれた人がいた、と／そして思う／わたしも 灰になったとき／生きている人を やさしく包んで／守り 生かしたい／そして 生きている人といっしょに／あかあか燃えたい、と

かつて火鉢のある暮らしがあった。火鉢のある部屋の「ほわつとあたたかい」空気が外気に冷えた顔を優しく包みこんでくれた。詩人瀬野としてはその火鉢の灰と燠の不思議に人生を重ねるが、そのように、この詩集もまた暖かく読者を包む。

この詩を読んでいて、思い出した言葉がある。「昭和三〇年代から昭和四〇年代頃まで、高度成長期以前の暮らしが日本人には一

番向いているのではないかと思います。日本は『貧乏』を世界で最も洗練させた国ではないか。粗末な家でもよく掃除して、野の草花を一隅に飾ったりと、繊細で美しい方法を生み出す（『座談会「昭和」の暮らしとこころ』という小泉和子の言葉だ。言葉はこう続く。「茶室が代表的ですが、粗末な田舎家のようであるが洗練されている。『貧乏文化』ですね。日本人は歴史的にこういう暮らし方をしてきたので、絢爛豪華やぜいたくは身につかないのです」と。

『Messer』六三頁を読む。女性ばかり七人の詩誌である。発行人は香山雅代、編集人佐伯圭子。今号から加わった森田美千代の「北国の故郷」という随想に「ディゼルカー」という彼女の詩が載っていた。

ふり返ると青い風呂敷包みにあの日が包まれて／忘れられた形で／春なのに風が冷たい／制服を着た少女が乗っていた一両だけ／ディゼルカー／蛇行しながら 彼方の心音を聞く／田植えは子ども一人前／ぬるぬるして足が抜けない／指二本で植えていく／束がなくなるよ ポーンと苗が飛んでくる／ザーザー 大雨のように桑の葉を食むお蚕さん／金の卵と言われ集団就職列車に十五の友は／都会に行った／蛍の

光をどこまでも追った夏／吹雪く日が続く／何ヶ月も青空も黒い土も見たことはない／機織りのツーツートントンが聞こえる／訛りのことば心ならず／山里に陽は照っても耕田が広がり／若者は減った／小さく拳をぎゅっと握る／苦みが沁み忘れ物／の今

今時評の冒頭で触れた「高速道路化」以前の山形の風景が広がる。そこには瀬野とし詩集『まわれ まわれ』と同様に、人々の暮らしに無理のない時間がゆつくりと流れている。

『詩遊』No.83 2024 Summer を読む。編集人富上芳秀の詩「老いの位置」を引く。

五十年来の友と久しぶりに飲んだ。二人ともいじぎいになっていた。一生懸命、自分のことをしゃべったが、お互い耳が遠くてほとんど聞き取れなかった。深い老いの闇が二人の間のそれぞれの時間に沈んでいた。

「五十年来の友」と「一対一」で向き合うひととき、その仄かな喜びの中に互いの道程と交流の日々が片々と浮かんでいるのだろう。私にもこのようなひとときをもちたい年来の友がいた。羨ましい時空間だ。